ISSN 0919-4657

KONC

関西自然保護機構会誌

Bulletin of Kansai Organization for Nature Conservation

22巻1号（通算39号）



2000年6月
関西自然保護機構

表紙の言葉

「ニホンジカ」

文・写真　立澤　史郎

ニホンジカと日本人とのつきあいは深く長い。肉や毛皮から神鹿まで，生活の端々に彼らは登場する。シーボルト標本から付けられた学名は *Cervus nippon*。 英名も sika deer なので日本固有種と思われがちだが，日本列島だけでなくベトナムからウスリー地方まで，あわせて 14 亜種が分布するとされる。日本には，北からエゾシカ（北海道），ホンシュウジカ（本州），キュウシュウジカ（四国・九州），ツシマジカ（対馬），マゲシカ（馬毛島），ヤクシカ（屋久島），ケラマジカ（慶良間諸島）の 7 亜種が地理的に区分され，さらに台湾亜種のタイワンジカが友ヶ島をはじめいくつかの島嶼に移入されている。

ニホンジカの研究は，戦後の川村俊蔵氏の社会学的研究に始まり，その後1970 年代後半の㈶春日顕彰会のプロジェクトによる数多くの成果など，「奈良のシカ」研究はかって日本の哺乳類学をリードした。当時の論文を見ると，社会学や行動学だけでなく，個体群生態や群集生態，それらに関わる生理や繁殖などの基礎生物学，さらには管理システムや市民学習など，現在の保全生物学の範疇を十分にカバーする議論が展開されている。著者の多くが KONC 会員でもあるこれらの世界的な先駆研究が，その後継続しなかったことは非常に残念である。

その間，ニホンカモシカよりも絶滅が危惧されていたはずのニホンジカは，いくつかの理由によって各地で分布面積と個体数を増加させた。そして農作物や林産物をはじめ，自然生態系における希少植物種まで著しく摂食した結果，「食害」が全国的な社会問題となり，この「害獣」の密度や行動の科学的制御が急務となっている。またニホンジカが食害やアカシカとの交雑問題を起こしている欧米各国では，原産地での生態や行動に関する研究の進展が強く望まれている。熱帯から極地まで分布するシカ類の生態と管理の研究は汎世界的な課題であり，野生生物と人類とのつきあい方に関する試金石だと言える。

写真はマゲシカのオスグループ。無人島に暮らすマゲシカを観察すると，雌雄の食性の違いや，年齢による土地利用パターンの違いなど，科学的管理のヒントも多く見えてくる。近年はこのような人間の影響が少ない場所での研究も進みつつあり，シカ類の摂食が森林にとって必ずしも「害」ではないという研究さえ出てきた。はたしてニホンジカと森林系との関係を，私たちはどのように操作すべきなのだろうか。

ニホンジカとその生息地の管理問題は，特別天然記念物であり世界遺産にも登録された春日山原始林でも起こっており，本号にはこの問題にアプローチした 2 編の労作が掲載されている。奈良公園は，いわゆる公園部と原生的な森林部とが隣接し，人為と原生，森林と草地など，さまざまな比較研究が可能なフィールドである。本会会員による新たな「奈良のシカ」研究の開始に注目していただきたい。